



誹諧古今句鑑

夏

^ 5  
1190  
2





誦諧古今句鑑 夏之部

更衣 卯の花衣 袷

袷	出せ花さくけり乃一をなる	来山
袷	魚けうう干す日也衣の	嵐雪
袷	人先み函志の袷や文衣	許六
袷	一とろふ小袷よちるや黒木賣	其角
袷	更衣十日とまかくハ花片のり	野坡
袷	ちまきハく這子まこりころも久	宗瑞





一日も暮やむくく衣か心  
 吹返する上ゆるき裕か春  
 来  
 ぬまきや神うの都衣雪とら  
 平  
 砂  
 子あそびて脊中くく裕か  
 其  
 禮  
 夕たも急てよはさるる日や  
 其  
 禮  
 ちよと急と母のさるる衣  
 袿  
 徳  
 着やけハ老ハ老く衣あ  
 雀  
 舟  
 酢ふむせる者の元氣や更衣  
 宝  
 馬  
 裕急てふくや積の裏おきて  
 木  
 丹

尚麻ふ清て曼陀羅を修す

夏一

文衣ううう織らぬ罪<sup>古</sup>你し  
 周女

筑摩祭

何人よ虚なきくまれ禍の敷  
 雀  
 郎  
 つまねれと神やかこい禍れ敷  
 雀  
 舟

灌佛

ちらぬせふせしてんきる佛<sup>京</sup>か  
 助  
 豊







松栢小風の遠方や夏木 玄  
花藍  
仙里

懐旧

去るものも 疎し 心交ふ 乙 由

黒髪山画賛

昔茶ころのそ 意悲心涼き 山北 存義

ころころ茶

夏三

ころころ茶のころころ心地らぬ 純亮  
わらわら茶や人きて 玉圃

卯の花

うのむや一先ききて 卯の花 序坡  
卯の花や日光色ハ 卯の花 百里  
卯の花や卯のとき 卯の花 花菱  
卯の花や新茶小 卯の花 貫太  
卯の花や里れ 卯の花 操舟



小町画賛

落くらぬ雪のさるき花の山木 貞佐

牡丹

古庭小骨すまふりきる牡丹哉 嵐雪  
け家不曼いとたもふ牡丹哉 寺吟  
らりこくと崩まて志よ牡丹哉 恭以  
なりの池入我教も白牡丹 柳玉  
押せして花一輪れほらんこれ 夾束

夏四

もろこのの雲を極むや白牡丹 蒼狐  
陽をくももゆらりう牡丹哉 春郊  
十日の雨も二交をふほらんか 亀文  
る花を洩きて富る牡丹哉 梁山  
阿さやうふ花の無明の牡丹哉 龍昇  
一輪ふまき日御や又からん 治我  
た刀佩むらう牡丹子のむけ侍 吐風  
牡丹こそ唐のやまの花をくめ 治涼  
花のを膨て牡丹と晴小ける 宝馬  
牡丹のれ酒不風情ハ奪らまら 律富



志多うふ水のうらむ牡丹が花露

杜若

雨の口やつ挽てゆくうまつり  
杜若も一水ハおたまて  
笑中ハ紫さうりかき川さ  
濁るふとるハ降ともう知川  
伸る海かくれる海や杜若  
色海一池ハ漱ハ奇る燕脂花  
信徳 其角 来山 竹佐 乙由 呉朝

夏五

罌粟花

いく程乃世ハ奇麗也まのむ  
けしの花疎北え古き朝陽か  
まうけしや阿らう力なの花盛  
数んと寸隙をけうりや毒のむ  
けしちるや外のおまハ多  
穎てるせおちれてるき川幸れむ  
はくむくちう成盛やけしの花  
支考 貞佐 蒼狐 公曳 存義 笠祓 宝馬



もきとうふらるとや幸れ花心  
父夢や幸ちる色のる借ひ  
る氣もいとよやけーれむきつら  
素人  
花  
露  
我

別借

ちる時の心やすけよきーれとふ  
越人

筍

笋を竹ふちるまことく竹の垣  
竹の子やさそくけふ出る垣隣  
素山  
吳父

夏六

竹の子を過脱く顔中と成小危  
筆ハ切とる鬼乃腕の那  
筍や出その腫もの緑の先  
竹れ多下罪流くらせる寺乃藪  
竹乃子や芽あてんれいとーのもの  
木丹  
百童  
素盈  
玉圃  
如竹  
存義

こころ子とろーなむて

竹の子や千代とりよ写ふ益まきー  
存義

麦 秋



狂い合ふ子供のこけや 麦 畠 游力  
月の夜ハ犬もはけるや 麦の波 樓川  
花嫁の夕とともあし 麦代秋 雀舟  
麦枯て山畑凄き 卯月あを 乙外

杜鵑

音明の他ぞ残るほとくあは  
おハあめ月の啼こをちやうきす  
一帯の血小撲こふや本とくき次

夏七

かとうきん啼や 湖水けさ濁 夫 牝  
啼けハ梅てあぬ祓さめや子紀 野 坡  
大いふてさるハとやるふちともの 貞 佐  
啼乃山元とてほとくあは 乙 由  
葛城やけさかき心の杜鵑 尹 督  
初喜のら阿ぬあふハなり一時多 心 狂  
麻あろろ小千尋の庭や蜀魂 蒼 狐  
残るもの松風をのちなとまきす 梅 郊  
恋まれを初喜ゆさうほとくあは乃 雅 郊  
眼のさめて枕のゆくあはれを 涼 山

尾張



薄くもる山も霧起を杜宇宝國  
おとさきほ啼くは彼の赤合せ押童  
郭公まきくや自剝のほんのくか沾涼  
杜鵑富士乃事つらにおもたけを宝馬  
あてくろ眼はさめお危なくまは  
子規又よし月乃りりて後乙外  
夜光る玉を一丁急ほとおは帷月  
人あははあをこころを郭公其禮  
おとさきほ起おてはは早も形津富

侍杜鵑

夏八

うれとつを耳もよふおとさき望一  
子規くとしてお入 幸 祭 調和  
望乃夜ハ涙させてくれよ子規 ちよ尼  
比の直て奥歯小もおや杜宇 存義  
ほとさきほと斗 二日三日の月 小知  
神うけて待小虚を 本とさき次 旧室  
妾薄命  
我乃世も常古 一月少さき心 神

悼



聞も夏告るも 夢をそほとらきす 宝馬

年をかきおしつゝきもけりてかよきて  
う月の夜中の寝うまきとを悩まれけりおろ

かとも夏告るも 今二夜りぬ 秋方

かんこき

風ふぬ森乃 常戸かんこき 大坂 其角  
啼けハ淋し ちうねハ淋し かんこき 頼 叟  
うんちき されもけりハ 乙 由

夏九

一村おひとりのものをかんこき 蒼 狐  
きさのふも 昼寐をうんちき 春 郊  
うんこき 啼や 森のうろ候 貞 知  
梅尾ハ 梅尾中し かんこき 存 義  
かんこきに 訓て 久し 奈良の町 伯 幹  
ひとら 馬不馴て かんこき 左 簾  
中く 不 言  
ちぬねちち上つけ 涼 備  
まても一里く やかんこき



菰系雀

菰きりや池さく茂るトや一丸  
よききりや訓て芦屋此人の身  
きりやうくし昔ハなきると笑え危  
菰花や拍子そろくて舟大工  
晋窓

枝の蛙

るちらて枝の初音や雨うあふる  
地舊

夏十

枝う啼城や花小枝くれをせ  
えこ小城或きくや梅のるを  
玉圃

鯉

鎌倉を活ておけむ初う川を  
大勢の中へ一本松魚あり  
鯉あか先姐著を神て拭  
尋常小室をきれとや初鯉  
契うときな片方うけり初かつを  
芭蕉  
嵐雪  
其角  
春来  
古  
神  
巫



け魚小麻すゝるゝの 初 繼 蒼 狐  
 備見せら乃ほと加ひま 初 繼 龜 文  
 繼うれ當りわ荒きあ書ふ 梁 山  
 晴ふ危繼の光と日里 日 方 菊 人  
 一町を造てあうたう 初 一 つ を 菖 人  
 孫し子そ法師ふはせし 初 松 魚 沽 哉  
 江戸一の鶴ハものうハ 初 う の 取 宝 馬  
 世ふまききもたさうりや 繼 時 素 角  
 伎晴をいほる 繼 の 栗 う 那 過 橋  
 伎晴のふ小魚かしくさう 繼 花 跡

夏十一

打水の隙ゆく夏や夕 繼 仙 里  
 海庭り各奴ほとと 初 う つ を 左 簾  
 初 繼 鬼の首とる 昔しき 北 沾 涼  
 引提て庭敷へ通るうのを 魚 律 富  
 扇  
 落す又捨小扇の片う 貞 佐  
 地味うと吸りてふやあらう 吳 父  
 漣を才ふ打よるる 扇の如 金 洞



團扇

喜丹より白き空扇も奈良うちを  
 来山  
 似蝶の可きと多し團扇賣  
 木守  
 坂下や夕アく此空扇うじ  
 素芹  
 独赤の空扇不暢の戦き此  
 存義  
 多枕不團扇の風和妹の女と  
 李克  
 夕草を扇乃師代や奈良空扇  
 不言  
 宵言なる老のななり  
 造團扇  
 津富

夏十二

夏日

行をを寐て居く見るや夏中  
 野坡  
 遠の山  
 山  
 後地  
 野徑  
 會盟  
 夫らよのさめて又より夜料理  
 其角

夏月



涼しさのかぐまわりなれやあまの月 貞徳  
 天の戸も尻さしもうか夏れ月 貞室  
 又とれていし秋とても夏のと 貞因  
 短夜も涼みのそく危月乃色 忠  
 市中ハもね白のや夏の月 凡兆  
 花もほほ月もぬめる光りが 采仲  
 森ふ事ばねもいれ危夏の月 素玉  
 ぬき賣の白を襦袢はや夕月夜 津富  
 又ろうらふ軒をめぐるや夏れ月 雪高  
 さくしけや包む小あまる森の月 不言

夏十三

短夜

涼しう夜や夫人間の遊み時<sup>如賀</sup>北枝  
 冷しや夕も火残る夏の朝 藤羅  
 短夜やかたつる初へ禱乃あす 梅寿  
 えや高しハ短しと和とて人死 雄跡  
 短夜や月あくと朝 露水  
 月せり禱なき里乃夏のあも 群島  
 明やまき夜の情そ朝 宝馬



侍てと来ぬ風か恨もや寐よの境 角 麻

鮎

ぬきみの石小灯影や一夜鮎 菅 踏  
かいしとや廣葉乃世の一夜鮎 崔 郎  
玉川一夜とまよふや鮎の旬 雄 詠  
鮎桶のぬきそ各残一夜妻 左 簾  
ま〜桶やあれぬとわめて後のぬ 梅 翁

夏十四

蚤

きらきらとる蚤はほこやとる蚤のぬ 其 角  
景情も阿きよ〜蚤の行葉が 才 譬  
おてかゝる蚤小志さらぬ武士小侍 中 好  
おこらぬし蚤とる指の搦へやう 初 実  
蚤悟〜寐ぬ小町行禱の丁念 乙 外  
あゝぬ夜に眼の種を費のぬ 秋 色







榭乃内へ暮まれをまうるの山 芦 皓  
栞の葉小なる立の作る如きは 芦 英  
かやちちや妻小新けてあつる 望 秋  
故不勝ぬおつる 磯 磯乃山 接 冷く

核

蠅

蠅小いくる眼ふちうらなき屋敷が 子 堂  
蠅をうい小傍眺まかり 標乃蠅 尺 艸

夏十六

るの蠅を乃うつを歩 行 々々 超 波  
赤兔馬を躍る守 蠅の力のか 蒼 狐  
朝の回ハ蠅もあまう一魚の店 素 芳  
織やめハむるる 蠅や接の上 左 簾  
却あもゆ涼あれハそ 夜乃 蠅 李 克

蠅 虎

蠅とてやあはれなる 小 蟻 丹  
魚じや蠅とて 蟻ふるもろろ 市 仙



蝸牛

猫の子ふ喚れてゐるや蝸牛  
古衣の石の音〜  
角出せよ地ハ一寸のかさばり

糸のワ〜

今や零不其の穢ゆ〜  
仙雀

螢

夏十七

螢火ハ百のもの何ア 借川 梅翁  
艸の葉を落る〜  
ほろろアヤ船既碇て是未か  
まをたかひ小町へ出るる 常の乳 一 林  
わらわちや星の曇され息をい 月 下  
わ〜ん螢の何〜  
おぬむ螢〜  
螢小似て我小字治乃あるが 蒼松  
螢もも休む息あるは 梅郊  
筆の付来小ねよ 龍昇



ゆーくも枝をもちて 蒼の 存  
川とれて水際とくや 雀の 舟  
むるる乾くて 舟なるるる 風 舎  
きあふ月夜系々の 木 丹  
風のあはやかく 燈寸 婆 百

蝙蝠

蝙蝠もかけろよ 蒼狐  
うらるるや古き軒 操舟

夏 六

蝙蝠や行きの湯をそく 存義

鶺鴒川

鶺鴒くもよ若き八人の目も立 信 徳  
あやあやハ 越 人  
人のま乃かゆ 越 人  
たしとさし白髪も 越 人  
鶺鴒ハ黒しき 越 人  
鶺鴒くもよ 越 人



夏行

從城の夏書やさくや仮乃宿其角  
たまくとそ故を殺す幸夏百日雷千那  
夏にもとや知も其伊ふ谷乃坊公曳  
夏書して意初る世と成る急粧叶  
妻侍れく一夏こもく温泉の滝慎我

端午

夏十九

上童書や粽のほととぎすやう珍列西吟  
東家や町も五月乃菖蒲太刀栗堂  
祝ふ也妻も早月の玉くけ純亮  
阿やめら所引そ笑ふや泥まあま  
君の代ハ脚アそて足まゐる壘かふ  
和を入て女使乃壘か那存義  
紫くくれのみ日の月やあそ餅  
押一ハ男れ子うかけらぬ酒樓川  
吾リハ菖蒲ふく日の古新樽魚塔  
赤水の波うち際や壘か那存義



つく戸麿く熾のひとりの お 左簾

まの結

若人の意地や張らまの結 純亮  
素引して聖のひとりとまの結 崔郎

印地赤

まの結ハ派治の才子也 印地赤 栢邑

夏 北

大子鞭うのや印地のなぐれ足 玉圃

若竹

若竹の末を遠くへ海に投じて 秋色  
若竹やまけなぐ伸て葉をふくむ 袿徳  
若竹や世のうねりけきあし 心袿  
若竹や如雨露の水に別る春 来  
りの竹や一むら續く朝の梅 郊  
若竹也竹の青も若竹の士 存義



若竹の言葉少あそうつくしき吐鳳  
 若竹やまなふ不晴し朝日和曳尾  
 若竹の雲ふさよ日てりる玉圃  
 若竹の志なくや風も定まらぬト人  
 若竹ふとけれあを見初けり花  
 急子の耐場みえさうちと竹  
 花  
 跡

田植

早乙女やほきぬものを唄ちのこ来山

夏廿一

姑乃魔や早苗の一片かゝ柳居  
 植てのくくも稗妻や早苗とち希因  
 接燥より天下れ父母乃田植を蒼狐  
 早乙女やぬきぬ姿をぬのし梅郊  
 子乙女や子のまひ足の揃よ唄吐鳳  
 うるくしくも植し田の夕まらる買明  
 階子田やうちさけらる植仕也何来  
 振きよし田植とやまた物くらむ雞冠  
 早乙女乃唄のをしきや松の風婆百  
 うる田乃ほくまやうさそ女のを津富



棟花

らんうめと棟や雨乃花くまると  
芭蕉  
大木のさる弱はよ花棟  
吳仙  
旭たぐや棟むさく朝ほけ  
葛十

紫陽草

紫陽草の中合せて咲く  
龜仙  
あちさおふきく旭  
夕日  
乙由

夏  
廿二

紫陽草の下ゆく水や花雪川  
加賀  
芦丸  
あちさおれむいろくふるや倦  
貞知  
紫陽草やむさくを八重ふ咲まらめ  
宝馬

萱

朝夕や花壇ふ世事を  
吳朝  
わさくし叶さきとも花ハ  
葵足  
花さくハ捨けしうさゆ  
敬之



萍花 藻花

萍の花をよと居る日 和の那 梅寿  
うきく月のあふ清くく 風もよ 雀舟  
ものちやひと川又あせはほらら 吐 鳳

青梅

青梅や井小志くく 花乃 数 心 担  
妾 命

夏 六三

実いとうき伐らる梅の蔵に於 澄く

漬梅

むらさねを朱ふ奈歩しや梅子くく 怯 我  
傍て干す実も紅梅乃はうら 吟 松

五月雨 梅雨

又月るハ堤やまきき 一 浪 河 望 一



傘乃下を晴間 籠さ 月 暮  
 白 鷺 や 青 く も な ら ば 梅 雨 の 中 不 玉  
 お 月 雨 や 色 紙 ま ら け 一 筆 乃 初 芭 蕉  
 お 月 雨 小 か く せ ぬ も の や 東 田 の 橋 一  
 湖 乃 水 滂 さ ら 多 り さ 月 暮 来  
 さ り 書 け ば 硯 箱 なる 唐 う づ 嵐 雪  
 お 月 雨 や 古 道 小 も 外 と 通 る 人 其 角  
 け づ け ば け の 柳 も 徒 古 泥 足  
 五月 雨 や 梅 田 の 中 け かい け づ け 伊 勢 三 千 風  
 め づ け づ け づ 北 日 京 乙 ぬ 日 枝 乃 山

夏 北 四

め づ け づ け づ 北 日 京 乙 ぬ 日 枝 乃 山  
 五月 雨 や 梅 田 の 中 け かい け づ け 伊 勢 三 千 風  
 さ り 書 け ば 硯 箱 なる 唐 う づ 嵐 雪  
 お 月 雨 や 古 道 小 も 外 と 通 る 人 其 角  
 け づ け ば け の 柳 も 徒 古 泥 足  
 五月 雨 や 梅 田 の 中 け かい け づ け 伊 勢 三 千 風  
 さ り 書 け ば 硯 箱 なる 唐 う づ 嵐 雪  
 お 月 雨 や 色 紙 ま ら け 一 筆 乃 初 芭 蕉  
 お 月 雨 小 か く せ ぬ も の や 東 田 の 橋 一  
 湖 乃 水 滂 さ ら 多 り さ 月 暮 来  
 さ り 書 け ば 硯 箱 なる 唐 う づ 嵐 雪  
 お 月 雨 や 古 道 小 も 外 と 通 る 人 其 角  
 け づ け ば け の 柳 も 徒 古 泥 足  
 五月 雨 や 梅 田 の 中 け かい け づ け 伊 勢 三 千 風  
 め づ け づ け づ 北 日 京 乙 ぬ 日 枝 乃 山

五月 雨 や 一 日 塔 一 佳 く 降



五月雨や夜あぢのの塘る 蒼  
 石小矢毛の所登地時そさ月る 涼  
 梅雨既竹の子蔭る垣根うを 春  
 五月雨や陸くう俵るか 夏  
 五月雨や晴る不暑き石の色 雅  
 物小鰯の色こそそ足由色 梅  
 五月雨や黒木小をき 古 鳥居 涼  
 人考ら以梅るハ晴より食中月 龜  
 片さこれやよう志まりる神の松 吐  
 五月雨むうー井筒乃在ー 存  
 義

夏 北五

洞多も憐る佳歌やさ月る 宝  
 狐火小晴宵足えより五月雨 馬  
 谷をを遠く温泉の烟アやさ月る 津  
 ささる孔や障子明進ハ折扇 富  
 饒今出さうる時を翠 吞  
 物考乃後てある 翠 鳥  
 五月雨の眼を定るは夕日多 雲  
 片さこれや考たうく何う 高  
 桔 棹 乙  
 山も川も障埋ときりわ翠 舟  
 五月雨や更し小がらけ月ハ何きと 外  
 玉 團



雷の立ちしき時を旱月雨平砂

水雞

口々く女好淋しき水鶏也 蒼狐  
池をく水鶏のきくきふさ一 操舟

鶯を入

うぐいさや竿藪小老を啼 芭蕉

夏 廿六

鶯や囀を引梅小亭と入乾 佐國

蟬

初蟬 暑くくや蟬涼く 解然し  
初蟬小涼くくるを啼よ急  
杉高しは水とも蟬乃あまき老  
並松や入日小絞る蟬乃了急  
蟬をくや水ハ水の山や一き  
芭蕉 心 梅 龜 公 素  
蕉 菴 郊 文 曳 竹



夕せしや老僧 峰の雲 陣れ雲  
 蟬啼や暮乃 透空けうろも 花 露  
 雨重に 到るくや けうり ね 蟬の 暮  
 夏山や 雲ふ地を 出し 虫乃 色 雀 舟  
 いつちりよ 照る 不志く 蟬の 丁 色 蛙 声  
 柿色の 衣けく せと 蟬 代 けう 如 雷

氷室

蟬をく せや 氷室乃 山く け 春 郊

夏 廿七

君の代や 氷も 室乃 かつ 貞 知  
 老の 齒の かけ ぬ 多め や 氷 峰 貞 川  
 歩かろの せき や 一 系 けい 氷 の 貢 五 陣

不丹詣

早の 夜乃 雪 氷 峰 衣の 富士 行者 玉 圃  
 去の 白ふ せ 足 おろ 守 雪や ふ 二 詣 市 仙  
 不丹 詣 下りる や 峯を け 一 毎 丸 簾



祇園會

月祥小山ハ陸ラシ 祇園乃會 風虎  
祇園會也神のまふく子向山 如貞  
祇園會也海山かやう人の山 大坂 保友  
月祥也松系西ハ入片やま 佑徳  
月不之也兒の歌乃存化粧 曾良  
祇園會也山又山ハ系めとち 純亮  
夜をちめて飾置きたり函谷祥 亀洞

神輿洗

夏北八

清むとて西もあまらや祇園所 存義

江戸天王祭

山のあはれ國とほるや祇園の会 宛郎  
世のまじき事や祇園正のまじき事 宝馬

暑 日盛

水うてや蟬も存まぬとふと 其角  
沢原の肥りるるあけさか 嵐雪  
瓜ハまき去さくおきて照日系 伝説



道場小蘭千す奥のあひさだ栗根許六  
 日の岡やあひさきて暑き牛の舌栗津正秀  
 裾とくろ何ふろくせん夏ころもこの舎棘  
 膝下るはさうり暑く大津怒風  
 暑き夜やいほくそ足け尚白  
 李もる店の埃アの暑く万乎  
 負子小髪たあうり暑く北周女  
 勢乃砂こまうとむ何つさ多風周  
 柳さくろゆにあくぬ暑外旧室  
 暑き日や指もはれぬ紅をけ子代尼

夏 廿九

なまかり小雨雪見ゆる暑のか 蒼孤  
 日乃うらや松の團光る小招系 一  
 息吹小柳の足ゆ新夏 露北 一  
 傘乃白よてもくろあつはりれ 涼帟  
 茶むらにもえさけ何乃暑北 梅郊  
 滝のきい何ちて山路の暑外 春郊  
 う川あふ暑さ裁切る大路外 栗堂  
 や中虫も白ひて暑きる夜外 貞知  
 ほつととせ松落る日の暑外 吐鳳  
 暑きやと昔松茂る市川さ外 来道



暑き日や海を埋める戸の影  
 暑き日や枕ひと門を掛あけ  
 水うちも七そ持する暑くのな  
 多き月や十日代所の侍きき  
 國西の影才ふかしくあけ  
 いづつらさをきく中夜に暑か  
 おろあけハ納涼ゆき乃暑あを  
 一里塚小坂さくなき暑かな  
 鬼蓮乃池ととらるるあつさ外  
 小中おへ先通さるる暑あを

夏三十

日ゆくや夜涼ゆき乃暑あを  
 坂のあふ小舟さるる夜に暑あを  
 月盛やけ色さくくうあけの本  
 暑き日や乃ハ翠屏の汚き馬  
 砂風ふたてさめ一日乃暑あを

達摩賛

来る人小舟さるるいなぬ暑あを  
 心  
 窓雪

意はる人さかたて



雲峯

峯はらるる雲乃集する夕下此  
 俗衣若く道若若うろく一雲如峰  
 一日小寒川くつれ川雲乃夕下  
 白象ハ林兼吼らん雲の  
 之乃ける中祇の埃や平此山  
 考く川ハ古不れんて在るもの  
 入海小口もきくえと雲乃くね  
 沖の帆やかさなる雲此峯儘き

貞山 宋屋 心祖 蒼孤 春郊 龜文 梁山 玉圃

夏卅一

何心ちりや夜月乃雲此峯  
 露水

白雨

夕之也雲を也して啼家  
 鳴一さよふをさくら夕日  
 夕之也此のなき人此腕まら  
 ゆららや雲を思はらん此か  
 夕之や草にもれぬ乃信と  
 白雨や夕之もさるもの

其角 春来 專吟 乙由 乾什 梅郊



夕立の色研ちりき 叢の那 龜文  
 中とらて 様とり 日乃公 多 袷扇  
 夕立とちりて 乾くや 人の汗 百童  
 白ぬや 人志の まりて 去さる 加う  
 夕立や あら 花中 乃 舟 車 不言  
 白ぬや 誘ひ 添ふるを 舟 言 程舟  
 申ふきとらや 障か しく ゆく人の 音 艇丹  
 夕立や 濡ゆそ ぬれ 女中 連 郡長  
 白ぬや 霜も 目乃 さまめ 一うろ 万古  
 申ふとらや 向ふ 此 鄙へ 言 咄 一 津富

夏 卅二

夕立や 暁 馬も ぬき 亂 存 義  
 申ふとらの せひ 不二 此 夕 芦 皓  
 白ぬや 霜か ぬれ 舟 舟 ぬれ 色 波  
 夕立や 氷 強さ 舟 二 五 門 宝 馬  
 夕立や 氷 舟 氷を たく 喜 一 宝 馬  
 申ふとら 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
 夕立とら 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

納涼 涼風







ちろろよや凡ゆるる口乃花 梳 来道  
 ひと川あど納涼まきや家のあ 平 砂  
 出るもく納涼まぬ影や高休舟  
 まきしよや藤く出るもれ朝ほしけ 伊勢 摺 良  
 富士も醋の茶もまわぬ夕まきしよ 素 山  
 まきしよやをもひとく乃 守 月夜 ト 人  
 月の出てうしろあたりメすしよ 宝 馬  
 涼まきのハ藤くしぬおありを枝の色 津 宜  
 涼しよやまぢれもやまぬあ乃 萩 把 菊  
 黄鳥乃 鳴ふ出逢ふや門まきしよ 把 菊

夏 世 四

月宮ふ入るや五更のまきしよ ぬ 糸 乙 雉  
 夕まきしよ浴まやしてむ 月乃 色 水 樹  
 日清くまよや山田もまきしよ 水 の 香 芝 水  
 藤まきしよて納涼まきしよ 乃 乃 乃 涼 一 律 富  
 十八樓記ありと畧す  
 けろろろ 眠ふ又ゆるものハ皆涼一 芭 蕉  
 人の子いきてて  
 涼しよを藤てはゆり 刺るまきしよ 其 角  
 大虚涼一 布袋乃 指の古く 取 一

画 賛



新大橋舟中の作

涼しき水も山さみよりの鳥塊貞佐

清水寺の清く

涼しき水も山さみよりの鳥塊貞佐

清水

日内りるの岩とく使るしよ川外京常技

一筋ハ川も活けり但清水梅郊

高しき山や掬ひの清き堂栗堂

夏州五

夏州や清水も伸き牛の舌煮人

高き山も水もいさよの清き水谷梁

山の井や一口汗をけり水素月

里をいさよく桶の廻清き水素批

清水も岩も垂れまき水素批

け清き山も水もいさよの清き水素批

高き山も水もいさよの清き水素批

暑き日も水もいさよの清き水素批

乃増く水もいさよの清き水素批

乃増く水もいさよの清き水素批



しらし井

しらし井や なる異さの 裂くる 香 素 云

五石砂まで

はらし井や 田をみめらりも 水漬き 五 陣

蓮

孤くや 蓮ふふふ しておる ちりり 湖 春

白蓮 平治 小松 殿 竹 意

夏 州六

麻て 危と 蓮小 誘ふ 相ほ け 其 角

佛め 起て 公重く 蓮の 那 秋 色

六月 乃地 獄み ちりく 蓮の 蓮 之

照と くの 相ら ちり也 蓮 盛 吐 風

口小 水ふく ちる 蓮乃 味不 ち 執 舟

鯉を いて いく 蓮は 白ひ ち 百 萬

蓮乃 夢や ちと ちりく 日の 力 木 丹

昼う不



皇朝や暑いさるも花乃後  
會棘  
ゆるうちやうきまふよろぬ時  
吳龍  
昼鳥ハるふも負ぬさうり  
軽舟

青田

田く風乃初々風の青田  
公曳  
燕の後をきりゆく喜田  
帆舟  
徐々風吹く青田田つら  
左簾

夏卅七

瓜

胡露ふよこれて涼  
瓜の虫  
干瓜や塩乃干溜り  
控小ふ子  
紫く是る嵐晴こ  
瓜をくけ  
瓜畑やけはあまハ  
誰  
藤忽  
肥道一瓜のきき  
や  
俄照  
花  
むくをえをい  
菊一アんの瓜乃皮  
木丹

素外示す初半りりて  
そひころるハ  
竹きらのゆそ瓜の蔓  
蒼狐



葛水

葛水やそよの下ゆくそよけ川 季吟  
葛もや河なしく捨む葛ひとけ 亀文  
くろくろや黒きふちる襦の色 吐風  
葛水や字を定て暖乃雲もけ 葎十

抱籠

付戸伊まをそよるかの牛帰人 冠里

夏州八

抱籠やひとせうけ中 夢上 希因  
抱籠や昔乃筆をひととる心 粧  
曙や裳そくかむ所 婦人 貞川  
竹婦人け君ちくハハそ 夜を 抱亮  
身そよや夏もけりの牛 婦人 不禪  
抱籠と寐るろいふ 菜門 沾涼

虫干

禮忌て芳まためさむ去用干 本菜



積と見て歩行て又うう去用干 其角  
 虫干や一尋通了う山 貞佐  
 去干や花小亭ある庭ひ 猫  
 虫ほーや燈の干もの 袍 骨 宗 瑞  
 むー干や女了ろ小花の 陰 蒼 狐  
 狐ーの論語おろう去用干 平 砂

混合

浮らぬと毛井柱る口ハ義と差 芭蕉

夏卅九

綿の花たま〜蘭小似る此 素堂  
 番附を賣小祭乃きと此 其角  
 怠らて咲て乃不〜 葵の赤 才 磨  
 幼妻やあ〜れたる 照乃上 支 考  
 膝と〜の足号ぬき尾の茂り此 雨 園  
 刈拵や蘭ハ婆羅門乃一 警 貞 佐  
 父鳥や扇う〜ち〜 其ぬ〜 心 祖  
 早の昼や流きの留多〜 起 波  
 朝早園乃けし〜 翠 月 掛 巽 窗  
 おちふ事 深るし〜 汗 拭 以 貞 磨



孫起ふやや深き程にけりて葵  
 年毎小ぢりけりて麻のふくろ角  
 扱ひを急の仁に戸心太  
 排さくはきりて都れ宮居れ  
 くらなりやゆりくハ花の物り日  
 紫も花も氣香も桐乃茂りけ  
 井柱一日もけりて虎のる  
 室の天の下りけりて日うか片  
 咲ふりり花をてりてのいけりく  
 拵前の風さへけりて夏柳  
 玉團

夏四十

岩花や元はくろる九打坂乙外  
 川指や飛ハけりてぬ親子才伯幹  
 阿ふふふ似て冬瓜の花盛蒼兩  
 月ふうむむ雛乃花をや初茄子  
 橘や昔昔法れ社家乃軒渙光  
 納涼といふての後を舟遊ひ律富  
 又おまの日和も小鉢うり  
 花の後山ふりて  
 櫻の突らして暖めんて乃山一  
 讀

旅行







吹流をみまう川小 麻 被 枝 静  
序後していよく松の香もくも 秋色  
天の戸もぬき夜や夏神未<sup>真岡</sup>山 蟻  
夕風や忽行もな川 其文  
行てえむ三十日の月と夏端を 操舟  
公とてなこめて向ふ茅端の家 五梁

誹諧古今句鑑 夏之部終

附録

夏之部

一陽井素外

飼鳥小いさ水くれむ 文衣  
春きけふふや二重乃 夏衣  
かけのころおもたのころの 湯祭  
君の代や人ふ女も大矢敷  
若やくくあ紫乃 陰の濡佛  
榛の木も若紫をり危 朝あけ



風うけて寛尔と笑める牡丹花  
曙や罌粟を冷さき花はうり  
るさくくとま出み草にちる日  
八重乃草一己の草にちる日  
争の田み寸活一地の心  
中と交はれ啼や隣子此初月  
あところりや声さく夜乃牡丹  
かんとさ啼マさ月のとい日  
雪かちうてまゆる初月の尺  
夜松魚やをけて冷る水乃月

日昼の白きをに見る扇の那  
廓こそ目新扇や田舎人  
古志扇よしな一草を書き  
みしり花や種小送らふ人  
短夜や口糸あさりハ草な  
照言て既く此故やと  
樹小蚊乃我面我吾う  
むるる小蠅も見合す  
雨満る珠うも縫かす  
るる火やあやう



稀少の螢火ぬく〜宵のうら  
更ふりや草小螢此是をや起  
埴鳩やあるをなきの此家月夜  
鶉の息もたぐれて白蛇月夜  
人あつとけ雷やうらるる  
あつたきをさのころあよ笹  
粽結ぶ宿や着世の風騒く  
あけつて公張伸出す宿乃庭  
田植女よあまあてくせ其まのこ  
まの化くの囀や田植る二夫婦

ふりつる花をりむそ 初 茄子  
啼きらや一寸りして松の蟬  
蟬のあ寺ハ暑さもあ森あ  
水鷄きくや拈乃古戸此下を  
月の夜も早足小啼一あ鷄か  
み月るや日和一時 水此泡  
さるる孔や若草あ遠折一宗佐垣  
おのこ涼しくさな月の初水  
雅思舎や山毛いくとせふる  
傘群や日ハ照通すあうら



江戸牛頭天王まつり

月神や乳さとし江戸此大懺  
晴よけと手とりろよく峯と威  
半輪の月幽也雲乃みね  
夕立此をれて太菌のしつゝ外  
八つまでハカそふる懈乃暑うれ  
田の畑も揺と捜せあつさ哉  
夕暮や人けえくとゆく納涼  
風上小木葉をあり門をくみ  
八月小恨みや家乃つす員

け月ハ皆月夜なり 楳まみ  
次くさほと酒もさし以舟遊む  
夕風や川を零れををつくし  
山陰や清あのもや此忘き并  
荒海や若もさくしつれなれ月  
團扇とてゆくや向ふの廊の母  
暑き日とくすしぬ蓮乃さうりか  
ひるのちハちあも碓をけ咲も危  
畑の戸此登藤おの海しき田凡  
遠よ子あも去ハくとりよ瓜の蔓



瓜喰ふ馬士や夏節の歩りくは  
強居下の高昼静々瓶の瓜  
ふとそへて圍の灯影や牛畑人  
拍籠やもきふは此裸むし  
衣の香ふ人の倦りや去用干  
虫ほしや涼しき方小腰此物  
其たし神酒のさむ川社  
接ものや方か汗まらぬ上達部  
旅およし子泥くてるも 袷と記

送別

年を隔ててよる人の別れをきくに

まま世又かほしふ古茶とあはぬうち

人の母ろ一月忌小

世をうつとけし新茶もをや去る

背拍係齋

花北日ちりそへる後を思 牡丹

せら小文書つる人のちとまて

書小向小夜をな益をて火とらと虫

木丹入つて改むる時

別れせよまたに日し 暑さを凌ぐへし



兩大師不語てしおし

夕之や人と東の日枝於ろし

禅院了て

乱譜ふしる事なるき 百 日 紅

社改社能

病ハ初と行あひ乃方とち本とさす

附録夏之部終



